

クラウドナイン



木野花×長坂まき子 スペシャル対談〈後編〉

キャリル・チャーチルの代表作『クラウドナイン』を、
長坂まき子プロデュース・木野花演出で再上演することになった理由がここに…。

「もう一度『クラウドナイン』を演出したかった」と語る木野花と、30年前に「木野花演出の『クラウドナイン』を10回観た」という長坂まき子（大人計画社長・モチロンプロデューサー）が、その魅力をたっぷりと語ります。

（テキスト＝田中里津子）

▼後編▼

【「人間」というものを丸ごと描いている作品】

——木野さんが「ぜひもう一度演出したい」と思われたというのは、『クラウドナイン』に対してどういう想いがあったからなのでしょう。

木野 簡単に言うと、普遍性のある戯曲だからだと思います。時代とか場所とか関係なしに、人間というものを丸ごと描いている。人間はどんな時代でも、悩みや問題が微妙に違ったとしても、こんな風にああでもないこうでもないといつも泣き笑いしている。そういう人間の性（さが）、業を描いている。だとしたら、30年という年月は障害にならない。むしろ共有できるはずだと。それを今回、試してみたいんです。30年経った自分が演出して、どうなるだろうというのも試してみたかったし、自分でも観てみたかった。突き放した見方をすれば演出家・木野花が30年という時間を経てどうなったのかが、ハッキリとわかるわ

けですから。この脚本に追いつけなかったのか、それともまったく違う観点でこの脚本を読み解けるのか。自分に対する挑戦としてもやってみたかったです。

長坂 私は特に、いつか自分が『クラウドナイン』を上演したいと思っていたわけではないですけども。でも初演で使っていたジョン・レノンの『Happy Xmas—War is over』をクリスマスの時期に耳にするたび、この30年間毎年のように思い出してはいました。

——では木野さんから、やりたい戯曲として『クラウドナイン』ではない作品名が出ていたら、のっかっていたかどうかはわからない？

長坂 のっかいていないでしょうね。木野さんから「『マクベス』の演出やりたいんだよね」とか「『ゴドーを待ちながら』をやりたい」と言われたとしても「へえーっ」と言うくらいで。

木野 勝手にやればーって？（笑）。

長坂 「ぜひ、ウチの誰かを出してくださいよ」とは言いますが（笑）。



【「モチロン」って、なあに？】

——それと、今回は“モチロン”のプロデュース公演という形になりますが。

長坂 モチロンというのは、これまであまり表には出ていない名前なんですが、大人計画の公演の経理面を担当している会社なんです。なので少しわかりにくいかもしれませんが、つまりは大人計画の社長が、プロデュース公演におっかなびっくりチャレンジいたします！ということです。

木野 でも“モチロン”って、明るい印象でいいですよ。

長坂 そうですか？

木野 「モチロン！」って、肯定的じゃない。

長坂 そうですね、もともと前向きな性格なのかもしれません。あと私の場合、ぎゅーっとしてるのが好きで、隙間が空いているのがイヤなんです。だから『クラウドナイン』のチラシもほら、ぎゅーっとしてるでしょ。

木野 隙間に？（笑）。

長坂 隙間があると、どうしても何かで埋めたくなくなっちゃうんです。そういえば木野さんって、もともと美術の先生でいらっしゃいますが、どんな絵を描かれていたんですか。

木野 私は絵ではなく、彫塑なんです。ロダンとかマイヨールみたいに、粘土をこねていくところから立体を作っていたんですよ。

長坂 あ、すごく木野さんらしい気がします！

木野 彫塑って力仕事なので、女性がそれをやるのって大変なんですけどね。

——長坂さんも美大出身ですから、そこも共通項だったんですね。

長坂 でも私、粘土は得意じゃなかったですね。

木野 どちらの分野だったんですか。

長坂 舞台美術のデザインです。

木野 あ、その時点からもうそっちだったんですね。彫塑ってね、人なんです。基本、作るのは人体なんですけど、結局は人間を見る作業なんです。生命力の流れ、そして滞りを観察して形にする。肉体を通して人間＝自分を突き詰め、さらけ出すということを粘土にぶつけて、形にしていました。だから、その時の自分の状態が丸見えなんです。

長坂 へえ～！



木野 だから芝居をやって、最終的には中身を見ずにはられない。それで役者を追い込んじゃうわけです。よく(高田)聖子が「命賭けて! って言う人がいるんでビックリしました」って私のことを言っていますが、私としては「そんなに珍しい?」って思ってしまう(笑)。

長坂 アハハ。

木野 考えてみたら、彫塑をやった時はいつもそういう集中力だったので、ご飯を食べることも忘れて貧血起こすこともしょっちゅうでした。だから実際、命がけなのよ(笑)。作っている最中は何時間あっても時間が足りなくなってしまう。だから未完成になるかもしれないって不安から、さらに追い詰めてしまう。その癖は芝居をやっている今も出てしまっているんですね。役者を見ていると「まだ全然できてないだろ」って追い込んでしまうんです。結局、私がものづくりをしていた時の、自分で自分を追い込んでいくやり方が出てしまうんでしょうね。だから、厄介なんですよ。自分ならまだしも他人まで追い込むから。

——この程度でいいだろう、なんて態度が見えちゃうと。

木野 ダメでしょ、それは。ものづくりではあり得ない、あり得ない。美術だって音楽だって、いいものを作ろうと思ったら、終わりのない旅ですよ。だから芝居でも、まだまだあるんじゃないかと、役者から搾り取るみたいなことになり。それで、楽日まで毎日ずっとダメ出しをすることになっちゃうんです(笑)。役者も大変ですよ。でも、わかっちゃいるけどやめられません。

【木野さん、大人計画の印象は?】

——大人計画という集団について、木野さんはどのように見ていらっしゃいましたか。

木野 大人計画を最初に観たのは、駅前劇場だったかな。

長坂 何を観ていただいたんでしょう。

木野 『ふくすけ』って駅前でやりました?

長坂 いえ、あれはザ・スズナリ(91年『悪人会議』)でしたね。

木野 じゃ、スズナリだったのかな。初めて観た時はそれを面白いとは思えなくて、ただ舞台上で不可解なエネルギーが蠢いているように見ていたんです。それになんだか、怒られそうな気がしたし。

長坂 ええ? なんでですか(笑)。

木野 怒るといっか、排斥されそうといっか。私はここには入り込めないなって。それまで私たちがやってきたものとは全然違うエネルギーの流れだったので。今、考えると結構、挑発的な部分が多かったですよね、最初の頃は。



長坂 ああ、そうですね。

木野 だからその挑発される対象が私たちなんだろうなとも思えて、近寄りがたいものがありました。そのあとグローブ座でやった作品も観に行っていて、その時は「ああ、来たな！」って感じがしましたね。

長坂 グローブ座ということは、『愛の罰』の再演（97年）ですね。

木野 大人計画ってこんな風になっていくんだと思って、いよいよ牙をむいたなというか。最初はエネルギーの勢いだけが見えていた集団が、本性を突きつけて来た感じでした。だからその時は、面白いなんて言う余裕はなくて。ただ「これからどうなるんだろう」と、注目すべき劇団としてとらえていました。でも役者のひとりひとはまだはっきり見えていませんでした。あと、歌のヤツも観ましたよ。

長坂 アハハハ。『キレイ』（2000年）ですね。歌のヤツ（笑）。

木野 その頃には、大人計画は堂々たる大劇団になっていたというか。けどここまで来るとは思っていなかったですね。小劇場でもっとギラギラとねばっこくやっていくのかと思っていたのに、大きいところにも立っちゃうんだ！とびっくりしました。役者もその頃にはそれぞれの個性が際立ってきて、みんなうまくなってて。

長坂 本当ですか～、あらやだ（笑）。

木野 松尾さんの作品を演じていると、こういう風にうまくなっちゃうのかなって思いましたね。投げやりな感じで、「へえーっ」て思いながら。この「へえーっ」には「きっと私はここには入り込めない」っていうのがずっとあったから。大人計画には私は全然無理だろう、きっと松尾さんは私のことを嫌いだろうと勝手に思っていたんです（笑）。

長坂 よく言われますね、それ。「松尾さんは私のことは嫌いだろうから」って。

木野 好き嫌いがすごくはっきりしている劇団に見えるんですよ。役者の個性も、みなさんちょっと普通じゃないし。私みたいなのはフツーすぎて入れないだろうなって。けど気になって、今度は何をやるんだろうと思いつつ、いつもおそるおそる観に行っていた気がします。だから大人計画の人たちと何か一緒にやれるなんて思ってもいなかった。最初に伊勢さんとご一緒することになっても、どうなんだろうって思いつつ。

長坂 この人、どういう人？みたいな。

木野 そうそう。どんな芝居をやるんだろうって興味津々だった。宍戸さんとご一緒する時も演出する立場として「宍戸さんのことを私はどう演出できるんだろう」って、ビクビクしながらやっていた部分もあったりして。

長坂 宍戸が木野さんにビクビクされてるなんて、そのこと自体が面白い（笑）。

木野 そして紙ちゃんも含めて、みんな最終的に答えを出してくるといって、誰もあきらめず、貪欲に食らいついて答えを出そうと努力をし続けてくれる。すごく信頼できる役者さんたちだと思っています。





【全員本気。絶対に面白くなる舞台】

——最後に、改めて今回の『クラウドナイン』への想いを語っていただけますか。

木野 でも本当に、この顔ぶれは私にとって今、思いつく限りのベストキャストだと思っているので。

長坂 あ、それ、ものすごくうれしいです！

木野 その点は自信を持ってお送りできると思っています。そのうえで、私がどこまで踏ん張れるのかってことに関しても、それこそ死ぬ気でやる覚悟なので（笑）。そういう、全員本気の舞台を観ていただきたいですね。誰一人、手を抜いてはやれない芝居なので。みんな、自分のギリギリを舞台にのせてくれると思います。

長坂 あまりうまいことが言えませんが、とにかく絶対に面白くなると思うんですよ。「そのこと、みんなわかってる？」って言いたいんですよ。

木野 みんなに文句？ お客さんにダメ出しですか？（笑）。

長坂 いやいや、でも「これ、絶対に面白くなるんだよ！ そのこと、ちゃんと伝わってる??」ってどうしても思っちゃいます。

木野 もしかしたら翻訳劇だからとか、ずいぶん昔のイギリスの話だからとか思われているかもしれないけど、そういうことは全部吹っ飛ばして、気がつくと舞台と客席も飛び越えて、お客さんと出会えたらいいな、と思っています。そういう舞台になる気がするし、したいと思っています。

長坂 とにかく、役者を観に来てほしいですね。面白くない役者は誰ひとり、出ていないですから。

木野 あ、それいいですね。面白くない役者は出ていない。

長坂 本当に役者が面白ければ、どんな作品でもいけますけど、でも今回は特に役者を輝かせる内容の脚本ですね。あと、たとえば役者を目指す人なんて絶対観たほうがいいと思うんですよ。舞台俳優を目指すなら、見ない手はないです、これは。一幕と二幕の違いが楽しめる俳優ばかり揃えていますから。高嶋さんが二幕で「庭師ですから」と言うところ、ものすごく楽しみですもん。私以外は、誰も引っかかってないセリフかもしれないけど（笑）。「庭師ですから」、きっと最高だと思うな。

木野 あと私としては、今度こそ大笑いさせたいという想いも強くあります。30年前は私も気負っていて、力技でテンションを上げて追い込んでいくという切羽詰まった芝居づくりだった。だからパワーはあったし、笑える部分もそこそこあったんだけど、この芝居はもっともっと笑えるはずなんですよ。あの時、取りこぼした部分を、ぜひとも今回はカバーしていきたい。それができるキャスティングですから、そこにも注目していただきたいと思っています。

END

モチロンプロデュース 「クラウドナイン」

日程・会場：

2017/12/1(金)～17(日) 東京・東京芸術劇場 シアターイースト

2017/12/22(金)～24(日) 大阪・OBP 円形ホール

作：キャリル・チャーチル 翻訳：松岡和子 演出：木野 花

出演：高嶋政宏 伊勢志摩 三浦貴大 正名僕蔵 平岩紙 宍戸美和公 石橋けい 入江雅人